

説明場面における身振りの機能

—話し手の内観報告から—

大神優子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【目的】

聞き手に何かを説明する説明場面は、身振り研究で多く用いられてきた設定である。ここで話し手が産出した身振りは、聞き手に何らかの効果を及ぼすことが示唆されてきた。では、話し手自身は、これらの自身の身振りの産出について、どのように考えているのだろうか。聞き手が存在する場面で産出される以上、これらの身振りには、聞き手からの見えを計算したのも少なからずあると思われる。本研究では、説明の直後に内観報告を求めることで、話し手が何を意図して身振りを産出していたのか、あるいは、全く意図していない動きだったのか、その場合は自分の身振りを自覚していたか等を、探索的に検討する。

【方法】

被験者：大学院生1名。**材料：**図形説明課題2種(抽象図形、具体物各1)。説明対象1点と、その他の例2点のイラスト3点をB5の用紙1枚で提示。**手続：**材料の3点を含めた12点から聞き手が正しいものを選択できるように、問題用紙を見ないで説明するよう教示し、以下の3場面を設定。1.発話プロトコル：材料の検討・記憶段階で考えていることを全て口に出す→2.説明：聞き手(仮想)に説明→3.内観報告：モニタで説明の様子を再生し、説明時に考えていたことを報告(自由内観)。さらにこの後、実験者が細かく再生を区切って質問するのに従い、各身振りについて、意識していたか等の内観を報告(身振り内観)。1.及び2.は8ミリビデオ、3.はテープレコーダーで記録した。**結果の処理：**3場面の発話及び説明場面の身振りを全て書き起こし、身振りについては、形態及び内観報告に基づいて分類した。

【結果及び考察】

発話プロトコル場面：話し手自身の観察・留意点の他、「(この言い方で)人がわかるとは思えない」「もっとかりやすい言い方ないかな」等があり、聞き手を強く意識していたことが示唆された。

説明場面：Tab.1に説明時の各課題の有意味発話文節数、身振り数を示す。身振りの分類は、その形態に基づいて実験者が分類したものである。

内観報告場面：身振りの意図性：内観報告(以下、一部抜粋部分を「」で示す)に基づき、身振りの意図性に関する分類を行った。その結果、2つを除いたほとんどの身振りが意図的に用いられていた。意図としては、聞き手に説明対象の形や位置を示すため、話し手自身がイメージを喚起して話しやすくするため、さらに、両方を兼ねてというものがあつた。同じ動作を繰り返したり、手の形を維持したまま上下に動かす動きも、強調や「場の確定」を意図していた。また、意図的ではない動きも、手を動かしていることを自覚はしていたことが報告された。

身振りの機能：発話の補償—形態特性を活かして：話し手は、ことばでの表現が難しい場合に、身振りの形態による表現の違いを積極的に利用していた。例：椅子の座面とその下の枠を説明する際、同じように親指と人差し指で水平に輪を作る身振りでも、「枠は細いから(その他の)指ははなして」。発話内容の強調：同じ形を保持して再提示を繰り返す、繰り返し空中に描く等の身振りの多くは、「ことばを補うように、強調している意味で」用いられていた。先行によるフィードバック：身振りが無意図的に産出された結果、その身振りに次の説明の展開が影響を受けることがあつた。例：椅子の説明で、自分が座っている状況で説明するか目の前の空間にミニチュアとして描くか迷いながら「丸い座席があつて」と始めた際、無意識に丸を両手で示したため、「ついでこう手を出してしまった、形として。(中略)これでもう、ここに椅子作った方が早いだろう、って思ったから」。これらの結果は、説明場면을強調した今回の手続と話し手の特性を考慮に入れ、さらに検討する必要がある。

Tab.1 各課題における発話と身振り

	抽象図形	具体物(椅子)
発話(有意味文節数)	69	40
身振り(形をあらわす)	10	11
同(位置をあらわす)	6	0
同(拍子)	8	2
同(その他)	2	4
身振り計	26	17